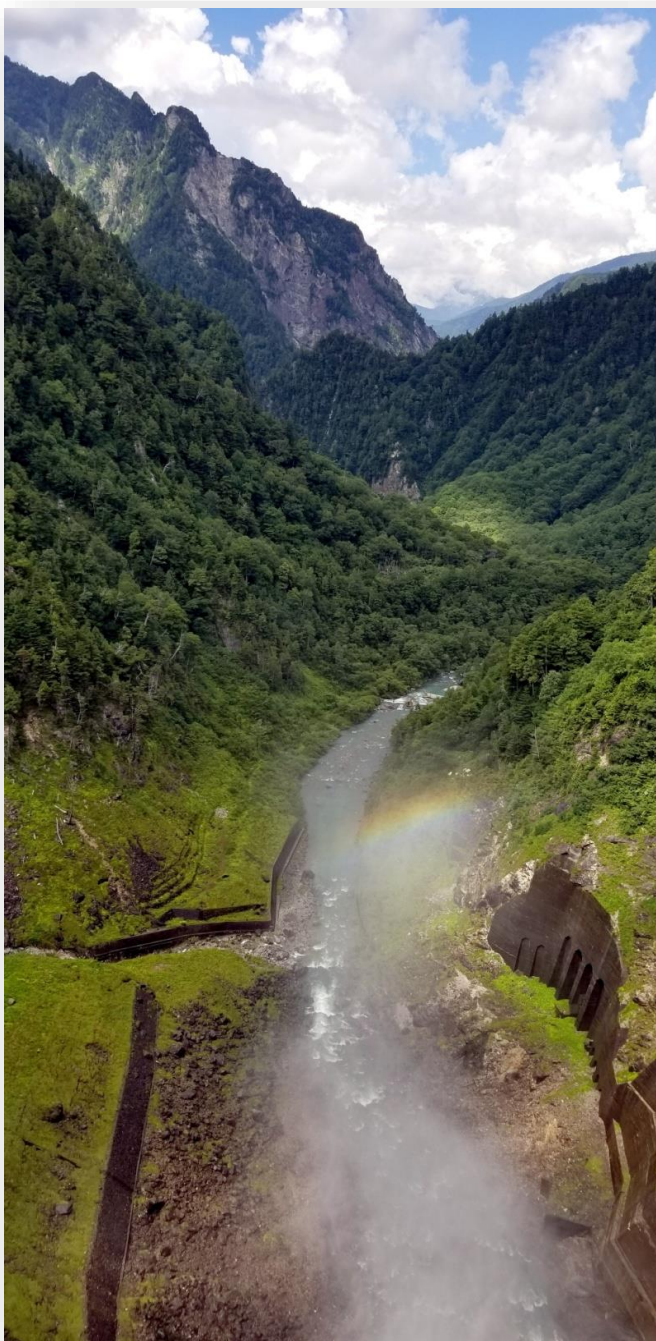


黒部の魔神

大タテガビン南東壁物語



(2021.8.7)

田中文夫

表紙の写真から

2021.8.7 黒四ダムからの眺望 (撮影=砂川瑞穂:掲載了承)

昨年9月の平日、霧雨の丹沢、作治小屋前でのことだった。
登るのを止めて帰ろうとした時、下から登って来た一人の中年男性。
作治小屋の屋外掲示板を見ながら、何やらスマホに写しています。
「それ、私が貼ったんですよ」・・・と声をかけると・・・雑談は弾みます！
話の勢いから、「よかったら、仲尾根を案内しましょうか？」・・・と私。
男性は予定の政次郎尾根を変更し、雨具を着て仲尾根へ共に出発！
以来幾度か、丹沢のバリエーションルートを案内し、登山の基礎を伝承。
男性こと、都内にお住いのステージ照明ディレクター、砂川瑞穂さん。

今年8月5～7日、砂川さんご家族は立山登山
に行かれた。晴天の中で立山を周回。雷鳥沢の
テントを撤収してから室堂を經由し、扇沢へと下山。



(砂川さん)

その途上で見学した黒四ダム。
ダム堰堤から放流された水は霧状になり、虹のアーチが掛かった黒部川
下流の写真。虹のかなたに・・・大岩壁が聳える！

そう、知る人ぞ知る「黒部の魔神＝大タテガビン南東壁」。

手前を遮る森林尾根の向こう側は、「黒部の巨人＝丸山東壁」。

両者を分かち、「内蔵助谷」。

もう、半世紀以上も前のこと・・・だった。

1969年5月、23歳だった私は初めてその大岩壁を登った。
そこから夢が飛翔して5年後、1974年プレモンスーン(春)、28歳でネパール・ヒマラヤ「P29南西壁登攀」(南峰7,514m)へと続いた。

さらに4年後・・・

1978年ポストモンスーン(秋)、2度目の「P29南西壁登攀」。
その途上、西壁千m上部の氷河が崩落し、吹き飛ばされて3隊員死亡。
近くにいた4人が吹き飛ばされ、偶然にも私だけが九死から一生を得た。
隊長だった私の、情熱を賭けた「アルピニズ登山」は・・・終わった！！

半世紀が過ぎ、今ふたたび「大タテガビン南東壁」の雄姿を見ると、
「アルピニズム登山」に青春を燃やしたあの頃が蘇る！！

68歳で生業をたたみ、今や後期高齢者の末席に座る。
あり余す時間の中で、わずかに残されていた写真とルート図を発見。
あの時の記憶を・・・、今ふたたび思い起こしている！！

2021年8月25日

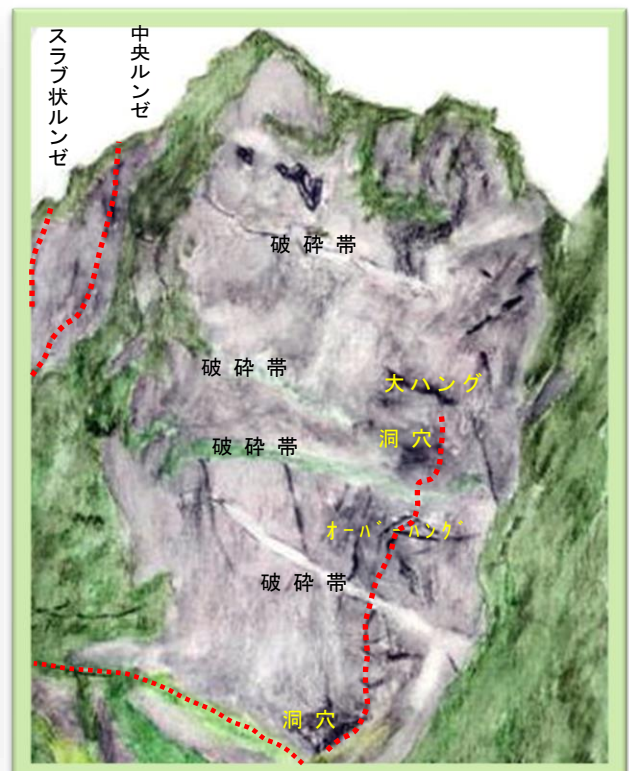


(黒部の巨人)



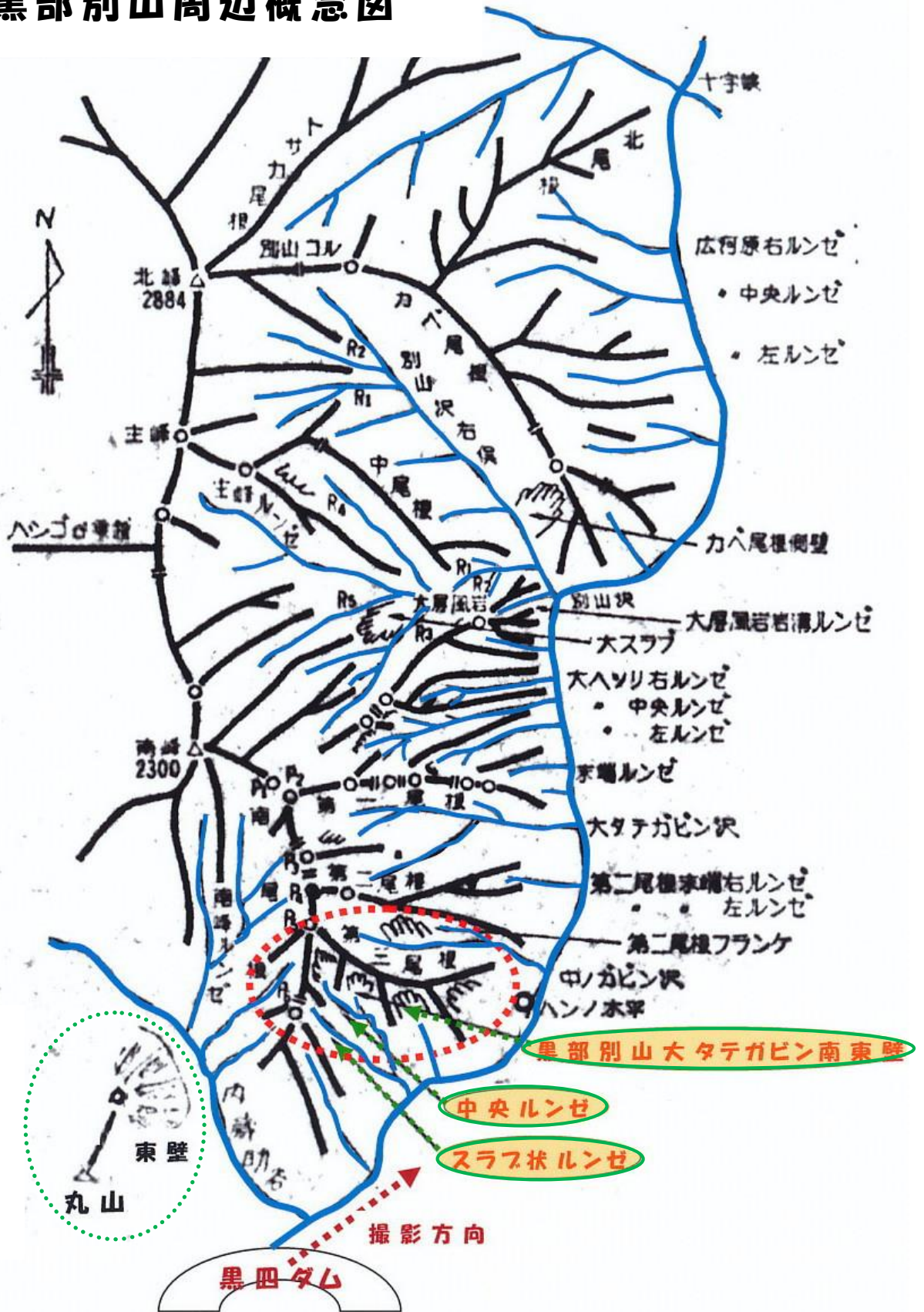
丸山東壁・緑ルート (撮影: 田中)

(黒部の魔神)



大タテガビン南東壁 (SNS 公開スケッチより引用)

黒部別山周辺概念図



黒部別山大タテガビン南東壁

黒部3大岩壁は南から北に向かい、丸山東壁、大タテガビン南東壁、奥鐘山西壁がある。そのいずれもが高度差500m以上となり、岩壁の急峻さの中にオーバーハングを随所に配している。そのスケールと登攀の困難さにおいては、日本国内有数の岩場である。地図に記された呼称を見ても、「丸山東壁＝黒部の巨人」、「大タテガビン南東壁＝黒部の魔神」、「奥鐘山西壁＝黒部の怪人」とあり、岩壁の特徴を良く言い当てている。

その中でも「大タテガビン南東壁＝黒部の魔神」は圧倒的なオーバーハングや洞穴を有し、まさに“魔神”そのもの！

黒四ダム建設における最難関工事が、「破碎帯を貫通するトンネル工事」であったように、この岩壁の中にも幾筋かの「破碎帯」が横断している。破碎帯の岩はボロボロであるが、おおむねバンド状となり、崩さないように“そっと”通過する。

第四期黒部川花崗岩（花崗閃緑岩、斑状花崗岩、閃緑岩）と思われるこの岩壁は、生成過程のブロックごとに隙間がある。突然の豪雨で停滞したある時、洞穴の中には小川のような水流が生じた。洞穴でビバークとなり、その水を沸かして飲んだ。突然な豪雨でパーティは上下に分断され、上部はコンロや食料が無く、新聞紙を箱状に折って組み立て、緊急時用メタノールクッカーで温め、白湯にして飲んだ。雨が止むと水流は消え、岩はすぐに乾くので苔生した岩壁とならない。

1、正面壁登攀の経緯

手元に残る資料から、以下整理。（岳人倶楽部・渡辺氏記述コピー参照）

1966年7月10日、鵬翔山岳会3名により「鵬翔ルート」初登攀。

岩壁基部から登攀終了点まで全長480m、グレード「IV級、A1」

（日山協自然保護ニューズレター 平成26年夏号、記事による）

1968年9月21～24日、東京岳人倶楽部8名（登攀3名、支援5名）

「岳人第1ルート」初登攀。全長20ピッチ、740m、グレード標記無。

1969年5月、山岳同人・風4名により「大ハングルート」試登

1969年5月、岡山クライマースクラブにより「正面壁中央部」試登

1970年5月、山岳同人・風3名により「大ハングルート」試登（断念）

1970年7月、8月、9月、東京岳人倶楽部による4回の試登

「岳人第2ルート」～完登時期不明。（渡辺氏記述コピーより）

1970年9月、雲峰クラブ（京都）による「雲峰ルート」（コース不明）

その他、東京緑山岳会、上田山岳会、登山用具技術研究会（登研）、試登

2、運命の時！

地球第3の極地と呼ばれたエベレスト（8,848.86m）が、エドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイにより1,953年5月29日初登頂された。この時人類は、地上の「高さへの挑戦」を終えた。（山は死んだ：本多勝一）

以来「登山」の課題は「人類」としたマクロな社会視点でなく、「個の内省」ミクロな視点へと移った。「登頂」は必ずしも目的とせず、「より困難なルートを辿って登る」バリエーションルート「登攀」時代となった。この変化は「登山」を、「社会的事業から個人的行為」へと向かわせ、「修行や思想・哲学、スポーツや遊び」の「文化」に変遷した。

困難さの指標は「グレード」という考え方が導入された。フリークライミングは容易な「1級」から、最難関な「6級」までに分かれ、人工登攀は容易な「A1級」から、最困難な「A3級」へと分類された。

1960年代、その流れを汲んだ「アルピニズム」は登山者の内省を奮い立たせ、「より高く、より困難なルート」に挑む登攀中心となった。

「より高く」は個人的願望を満たすヒマラヤ高所を目指し、「より困難」は「6級 A3級登攀」の岩壁を目指し、両者を満たす「ヒマラヤ岩壁登攀」は最大目標となった。この傾向は社会人山岳会に強く現れ、「ヒマラヤ鉄の時代」と呼ばれた。「鉄」は「ハーケン（独語）、ピトン（英語）」を意味し、岩の隙間（リス）に打ち込み、カラビナを掛け、ザイル（独語）、ロープ（英語）を通して登攀者の安全確保支点とする。岩に隙間（リス）が無い壁ではジャンピングで岩に穴をあけ、ボルトを埋め込んで支点とした。これら人工支点は、第1に登攀者を安全確保する支点となり、第2に登るためのホールドに積極活用し、後者を「人工登攀」と呼んだ。人工登攀ならば、任意なルートを登ることが可能となった。

大テテガビン南東壁をルート開拓していた1960年代は正に、「ヒマラヤ鉄の時代」の入口にあった。1968年、日本山岳会はエベレストを南西壁と東南稜の2方向から挑んだ。南西壁登攀は8,050mで断念。東南稜からは日本人初登頂を果たした（植村—松浦、平林—チョタレイ）。

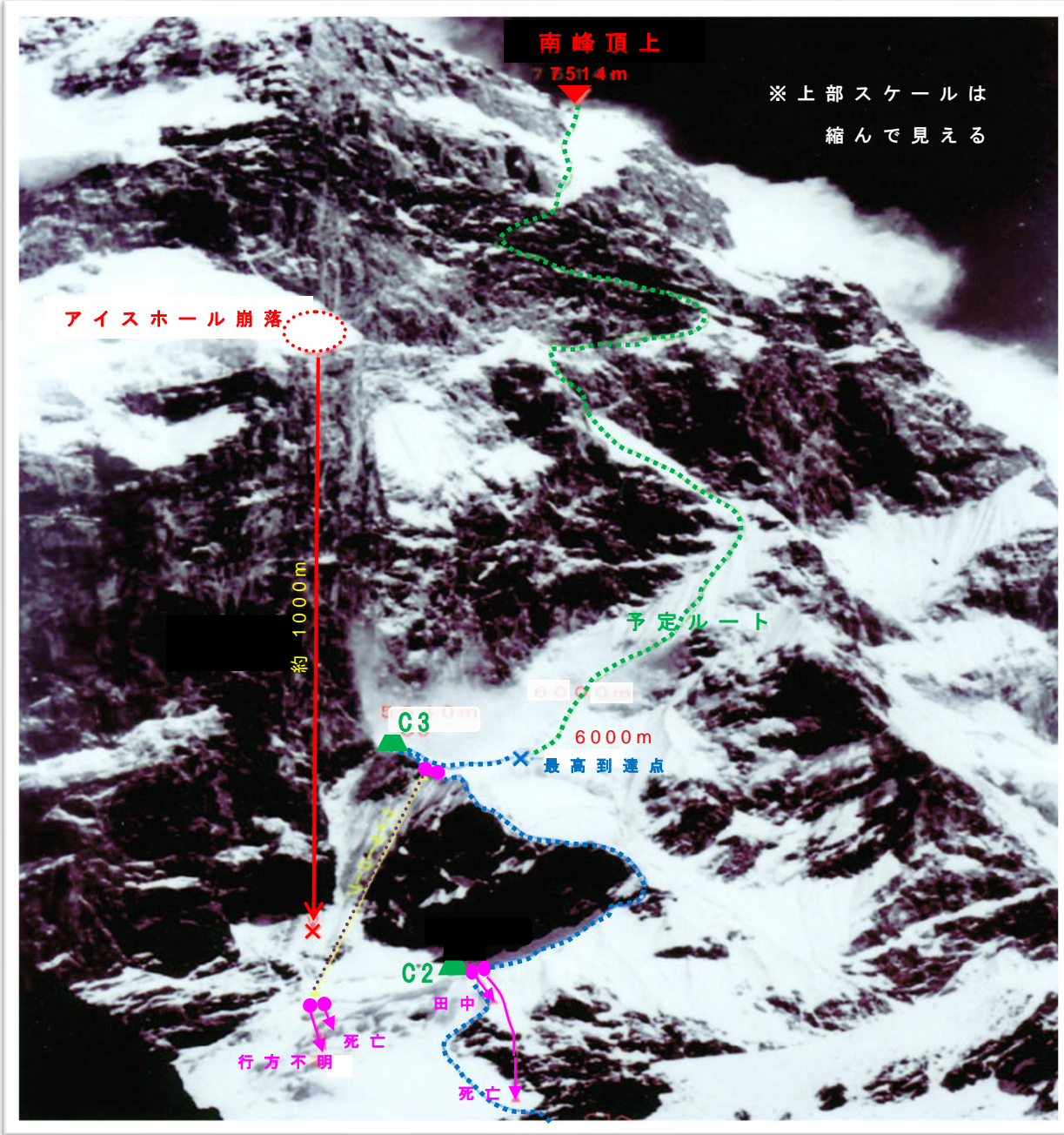
1977年、英国のクリス・ボントンはエベレスト南西壁初登攀に成功。

私たちも1974年横浜山岳協会隊に参加し、「P29南西壁」(7,514m)に挑んだ。春の雪解け（プレモンスーン期）が迫り、ジェット音を発するが目に見えない落石の恐怖に怯え、南西壁基部（約6,000m）で敗退。

再度1978年秋にP29南西壁へ挑むため、1976年8月、1977年8月の2度にわたり、大テテガビン南東壁沢でワイヤーロープを張って荷揚げ訓練を実施。しかし1978年9月14日、P29西壁の懸垂氷河が南西壁側に1,000m崩落。強烈なその爆裂風で吹き飛ばされ、3隊員死亡。4人吹き飛ばされ、私だけが九死に一生を与えられた「運命の時」！

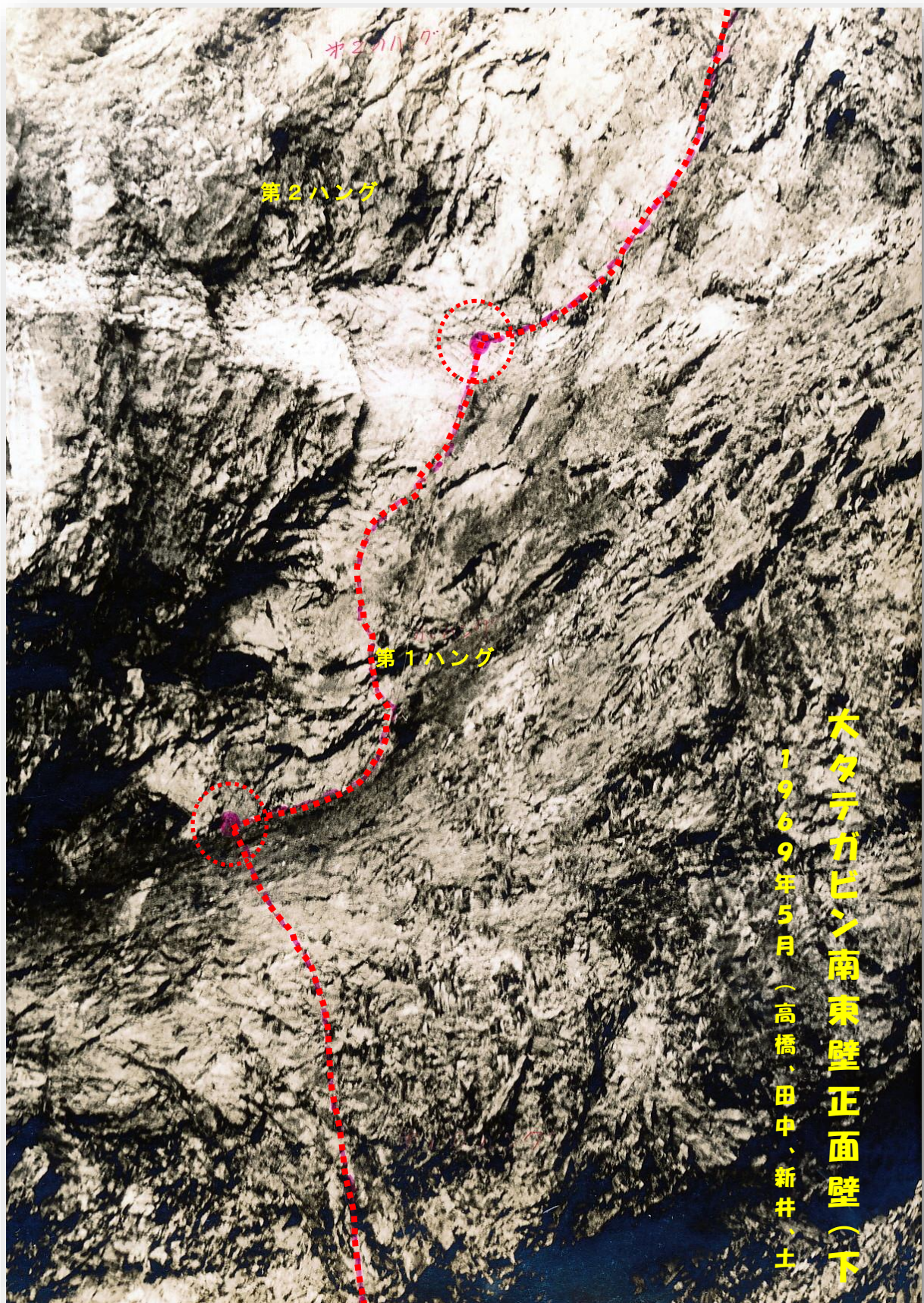
1978年 ツラギの会P29南西壁登山隊のルート検討資料 (この写真から、高度差、傾斜角度等の算出に利用した)

<一目盛=100m> 『空から見たヒマラヤ』 : NHK取材班・著 : 1978年6月1日 発行 : 日本放送協会



P29 南西壁 (写真は1974春、撮影:古川純一)
(1978年のルート記載:田中文夫)

3、1969年、1970年の試登から・・・ヒマラヤへ飛翔

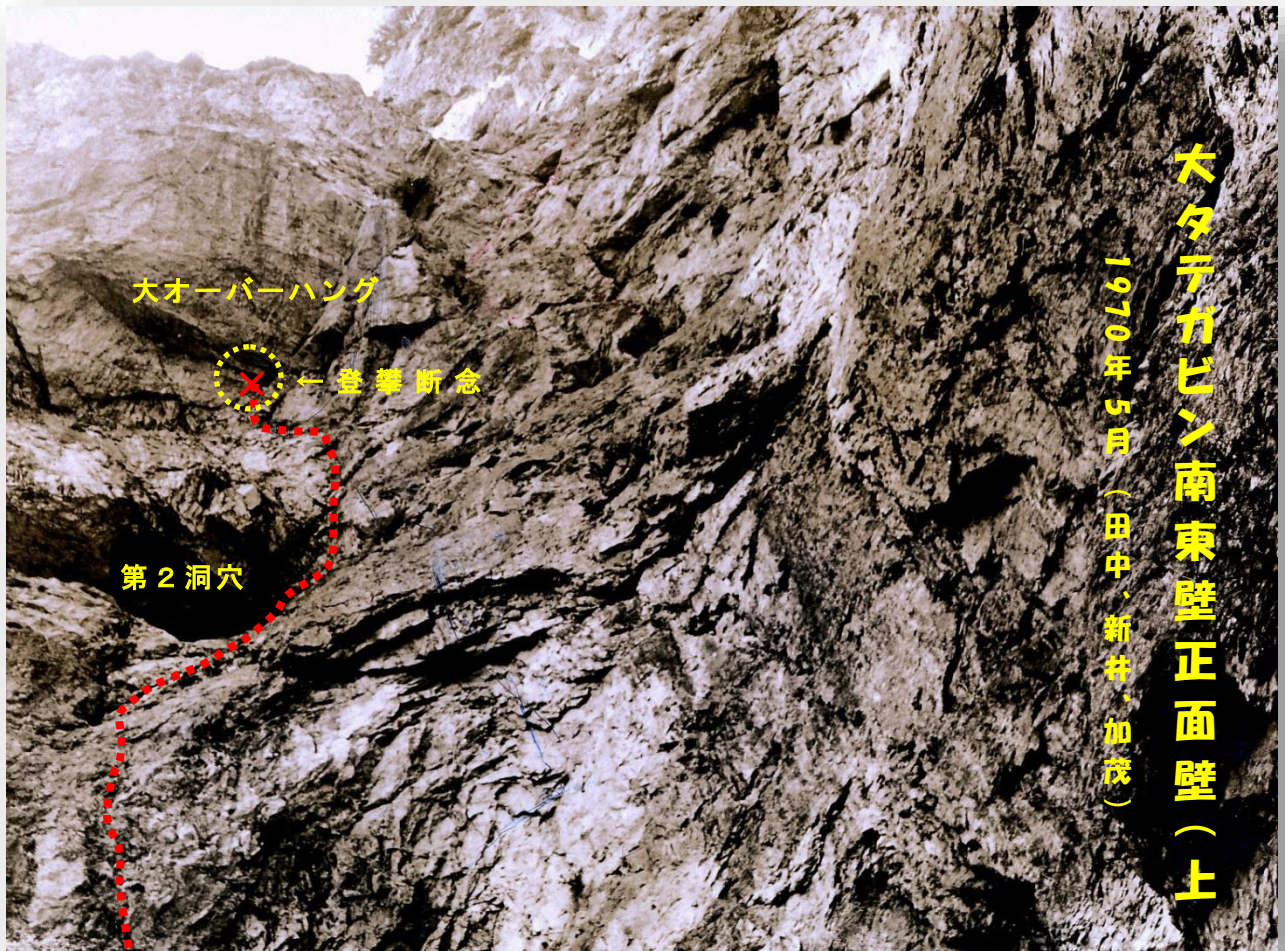


大タテガビン南東壁正面壁(下部試登)1969年



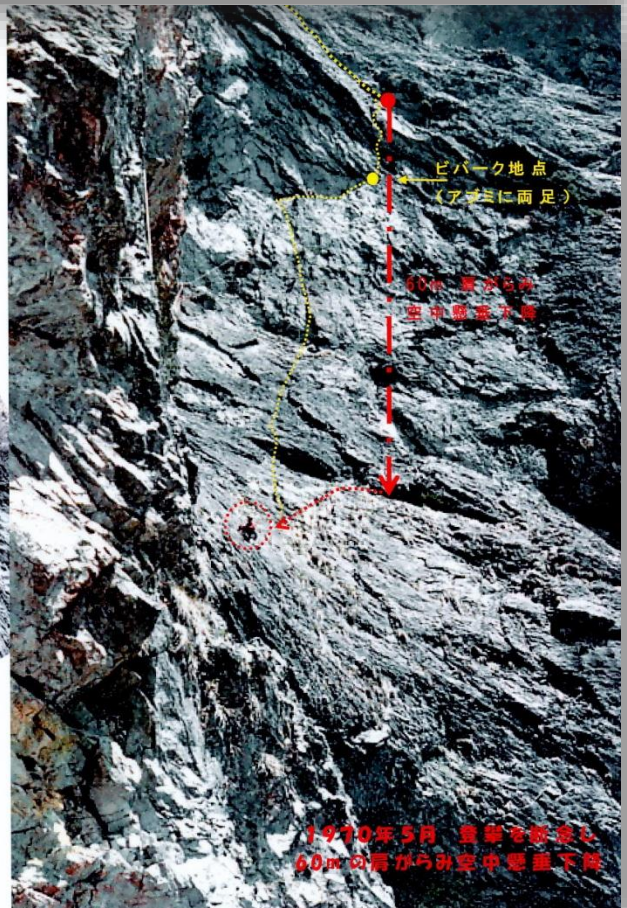
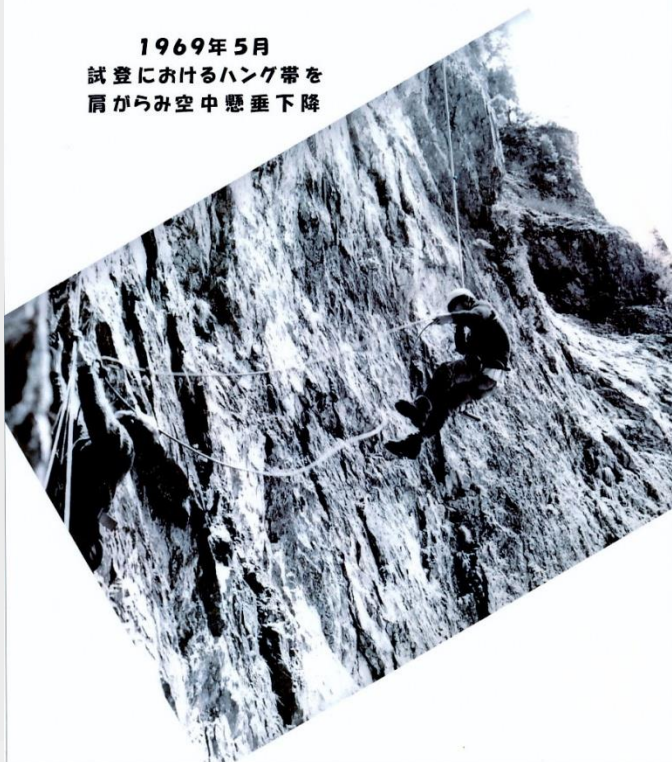
大タテガビン南東壁正面壁大ハングルート
(敗退下降)1970年5月(田中、新井、土田)

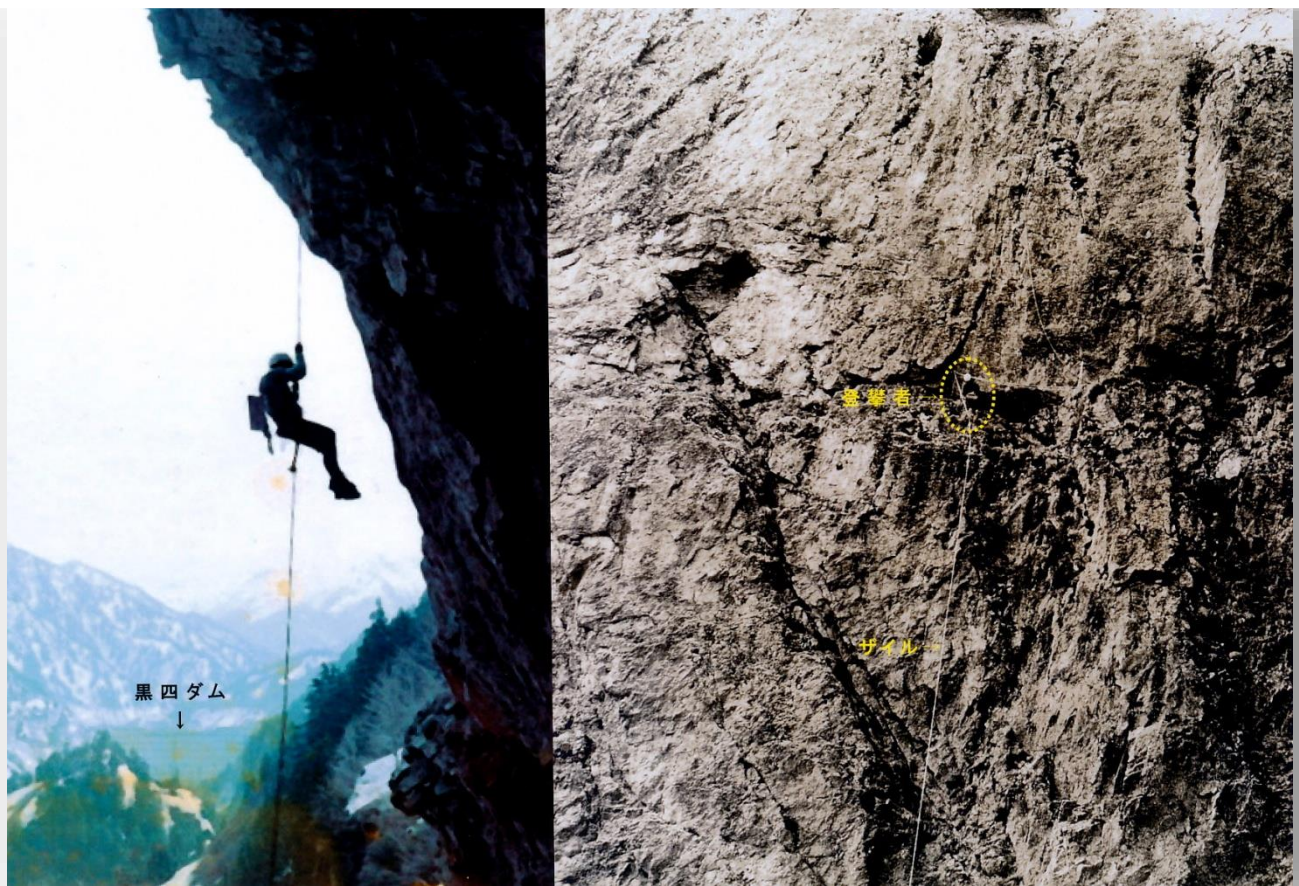




大タテガビン南東壁正面壁
(山岳同人・風ルート)

1969年5月
試登におけるハング帯を
肩がらみ空中懸垂下降





(左隣を登っていた岡山クライマースクラブ 1969年5月)

私の握力・腕力は普通成人よりも弱く、人工登攀は好きでなかった。この正面壁大ハングルートに挑んだ契機は、当時東京都山岳連盟傘下のコンテニューアスクラブで代表をされていた高橋福四郎さんの影響だった。私は19歳でコンテニューアスクラブへ入会、23歳で新たに「山岳同人・風(ふう)」を立ち上げた。かの高橋さんまでもが我々に合流。高橋さんは左官業自営のため人工登攀が得意で、すでに谷川岳一ノ倉沢2ルンゼ奥にある「マッターホルン状岩峰」を初登攀されていた。創設したばかりの山岳会が目指す初登攀として、高橋さんが「大タテガビン南東壁」を提唱。「ヒマラヤ鉄の時代」にあり、それを目指すステップとしては格好な舞台だった。しかし高橋さんはアルコール依存症が昂じ、初回の試登参加だけに終わった。以後は私がリーダーとなって展開するが、上記の通り人工登攀は苦手な分野でもあり、断念する決断は早かった。

これらを見ていたクライマーの神様・古川純一さんから声が掛かり、1974年横浜山岳協会 P29 南西壁登山に誘われた。「山岳同人・風」からは4名が参加し、中心となって活躍できた。しかし南西壁基部に到達してみると、目に見えない落石の恐怖を体感し、合議により撤退を決定。※撤退に古川さんは反対、大内登攀隊長以下は賛成。(合議の録音は田中所持)

4、時代背景・・・そして今

戦後日本社会は高度経済成長政策の波に乗り、社会活動も活発だった。所得が増え、余暇も増え、登山活動においても社会人山岳団体の活躍が、それまで主力だった大学山岳部活動を遥かに凌駕した。

その半面で山岳遭難が増え、谷川岳遭難死者数（1931年～2012年までの死者数 805名）はギネス世界記録にもなる。「三人寄れば山岳会」と揶揄した時代、私たちは登山に自由を味わい、自由な登山の究極は死に至る自己責任の範疇であることを強く意識していた。1969年、「山岳同人・風」創設における登山者組織の意味は、会報「風・第1号」に載せた。

右の「規約」は会報第1号に載せたコピー。

- (一) 社会人登山者として自立を目指す。
 - (二) より良い仲間を得る。
 - (三) 事故を生じた時、相互協力により最善を尽くす。
- その義務とし

- ① 山岳遭難保険に加入
- ② 山行前・後の連絡

つまり登山の危険性を自覚し、その上において登山者は、**自主**（自己責任）**自立**（自主努力）**共助**（遭難時の共助）できる仲間（組織）を目的とし、私が代表に就任した。

規約	細則
<p>(名称) 本集団は「山岳同人・風」と称する。</p> <p>(目的) 本集団は社会人登山者集団であり、登山に関するあらゆる状況において、よりよい登山者たらんことを目的とする。</p> <p>(二) 登山の実践に当り、よりよい仲間を得られることを目指す。</p> <p>(三) 同人の事故時は、相互協力によつて最善を尽くすことを原則とする。</p> <p>第三条 本集団は登山同人によつて構成され、別に定めるところにより運営される。</p> <p>(山行・責任) 山行は総て同人の意志に基づき、事故時における責任は総てその登山者個人に帰する。</p> <p>(遭難対策) 同人は山岳遭難保険に加入しなければならない。</p> <p>第五条 (二) 山行の事前、事後には別に定める係まで連絡しなければならない。</p>	<p>一、本集団への参加は身上書の提出、及び山岳遭難保険の加入をもつて参加と認める。</p> <p>二、本集団は東京都江戸川区東篠崎町三〇一六一三七一二、高橋福四郎方に事務局において運営に当り、同人の中より代表一名を選任し運営を把握しておく。</p> <p>三、山行時には必ず「連絡カード」を携行し、入山届は山行前、下山届は山行完了後四十八時間以内に「山行係」まで連絡しなければならない。</p> <p>四、事務局は運営に当つて次の係をおく。</p> <p>(一) 運営係：：運営の一切、集金担当</p> <p>(二) 会計係：：会計に関する一切</p> <p>(三) 器具係：：器具に関する一切</p> <p>(四) 山行係：：山行の把握と遭難対策に関する一切</p> <p>(五) 会報係：：会報の発行に関する一切</p> <p>五、同人は本集団の運営費として毎月三百円を納めなければならない。</p> <p>六、本集団の会計年度は四月一日より翌年の三月三十一日までとする。</p>

(風・第1号 1972年発行)

1969年山岳同人・風、創設当初の活動として、この「大タテガビン南東壁」オーバーハング・ルートの開拓を始めたが、2度の試登で断念。

1974年、横浜山岳協会 **P29 南西壁** 登山に4名参加。さらに4年後の1978年、再度 **P29 南西壁** を登る目的に特化した「ツラギの会」を結成し、「大タテガビン南東壁」へはふたたび、登攀や荷揚げ訓練に戻った。

1975年4月29日～5月5日、私が得意とするフリークライミング・ルート（全長550m）の「中央ルンゼ」、「スラブ状ルンゼ」を登る。一日で完登し、下降は森林帯を懸垂下降。

この合宿では黒四ダムに近い「丸山東壁緑ルート」も併せて登った。垂直とオーバーハングの丸山東壁で、「ユマール登攀技術」の習得に励んだ。1974年、P29遠征の頃から「ユマール」という登降器を使用するようになり、パーティ登攀の労力と時間短縮が図れるようになっていた。

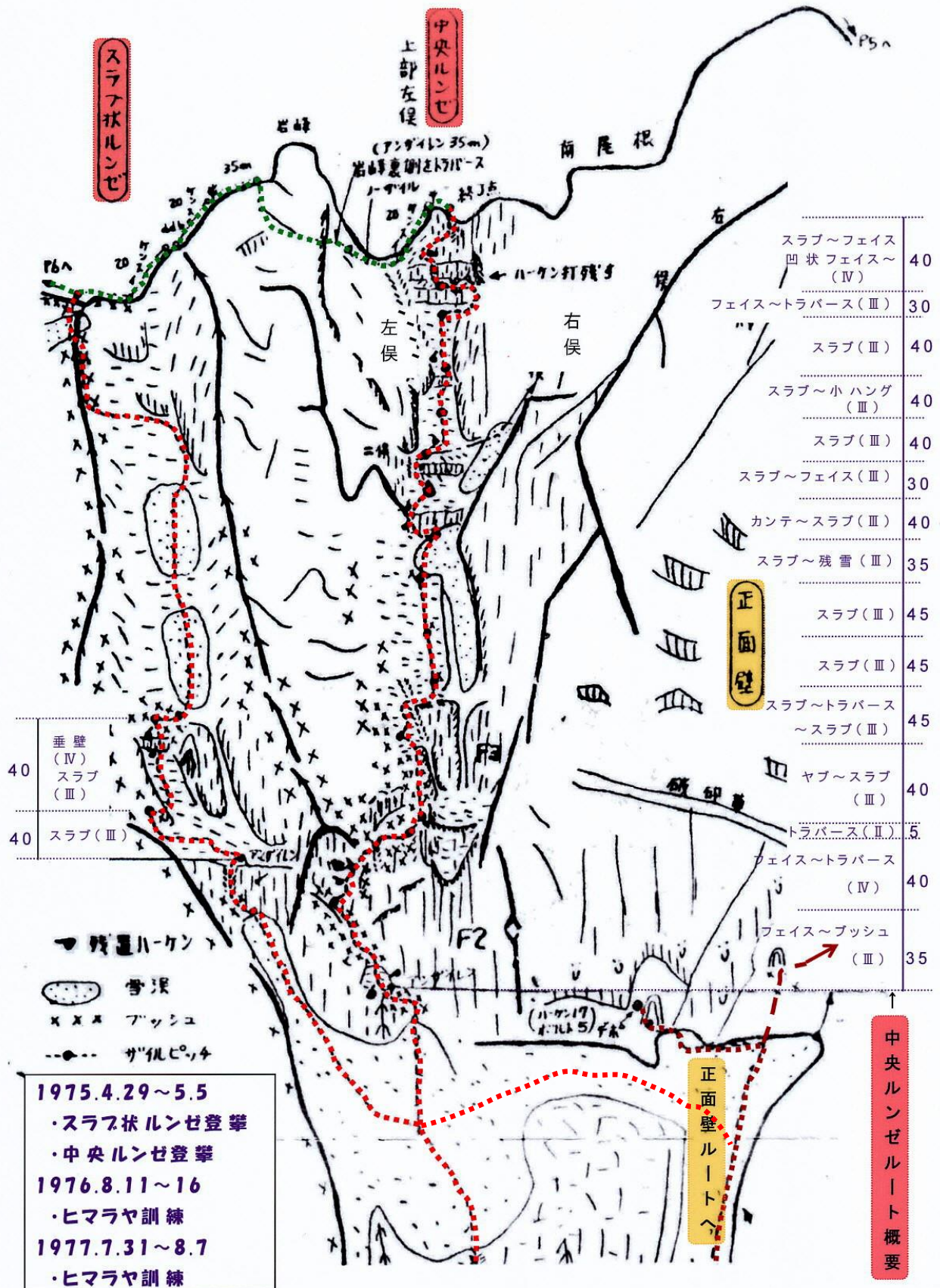
もし正面壁開拓時にユマールがあったなら、もっと楽にオーバーハングを越えることができたが、当時はまだ知らなかった。代わりにシュリングによるプルーミック法で空中を登ってみたが極めて難しく、実用的でない。ナイロンロープは自在に曲がるため、登山解説書にあるような姿勢はとれない。人間は頭部が重く、上半身が仰け反ってしまう。ロープに全体重に係る最上部の支点から「くの字」に曲がるため、さらにその上にプルーミックで支点を取り、上半身をロープに引き寄せておかなければ、オーバーハングの空中は登れない。

「丸山東壁緑ルート」のオーバーハングは、私が先頭でアブミ（登攀ハシゴ）を使って登り、セカンド以下はユマールで登り、時間短縮。オーバーハング乗っ越しは、足下空間が内蔵助谷まで500m以上も切れ落ち、極めて高度感満点でスリリングだった。

高度6,000mから始まる **P29 南西壁** は、7,514mの南峰頂上まで約1,500mの高度差がある。しかし空間感覚は圧縮され、500mも1,500mもさほど変わらない。「ワー！ 高い！」という感覚訓練のために、大タテガビン南東壁や丸山東壁は、うってつけなトレーニング場だった。

「アルピニズム」など、もはや現役登攀者にとっては過去の遺物であろう。しかし「個人成長の方法論」からすれば、未だその真理は社会的意義を失っていないはず。なぜなら、「文明進化のセオリー」だから。しかし岩にハーケンを打ち込み、穴をあけ、ボルトを埋め込み、前進する手段としての人工登攀は、自然保護の立場から現代は衰退している。しかし過去の一時、「ディレッテシマ」という考え方が流行り、山頂から直線を引き下ろしたルートが、「美しい」とみなされた。「大タテガビン南東壁大ハングルート」もこの一端にあった。しかし私の身体能力が不向きであることは、当時から承知していた。

黒部別山大タテガビン南東壁



「ディレットシマ」の極め付きはスイスアルプス「アイガー北壁直登ルート」にあり、日本人パーティ（加藤兄弟、女性の今井通子ら6名）により1969年夏、1ヶ月にわたって完登した。女医となった今井通子は有名人となり、リーダーだった加藤滝男はスイスでガイドとなるが昨年病で逝去、弟の加藤保男はエベレスト3シーズン登頂を果たしたが1982年冬期登頂後の下山で消息を絶った。

次世代1965年生まれの山野井泰史でさえ、「山での死は決して美しくない。でも山に死がなかった、単なる娯楽になり、人生をかけるに値しない。街では生を感じられないよ」と著書『アルピニズムと死』で語る。

このように生命を燃焼し尽すまで躍動した「スーパーアルピニズム」世代は、戦後の「高度経済成長社会の成長風」を背景としていた。

しかし平成から令和へ至る「低成長平準化社会」になると、「登山」はすべからず「産業」に組み込まれ、生命を燃焼し尽す「アルピニズム登山」は顧みられなくなった。登山は産業に組み込まれたがゆえに社会依存が増し、登山者の「自助、共助」意識は薄れた。遭難事故は「公助」頼みとなり、安易にスマホで救助依頼。連絡に呼応して警察、消防が出動し、僅かな民間山岳救助組織も呼応する。一見スマートで組織だっただけに見えるが、「公助」が介入するにつれ、「登山者の自立と、自助・共助意識」は薄れ、「登山者個人の間人総合力の劣化」を招いている。

スマホの普及で現在位置の確認・発信が可能となり、地形図に合わせた読図を容易とする。気象情報を受信すれば、おおむねの気象概要は理解できる。しかしかつては雲の流れを読んで気象変化を知り、ラジオの気象通報で天気図を描き、山岳地形、植生、日照、風向きを観察し、氷雪の形質を読んで雪崩の危険を予知した。それら山岳自然の総体を知る努力をした。現代は山岳環境の中に「産業化した日常性」を持ち込み、登山者はデジタル機器で「情報化した日常性」を活用する。

今や山岳自然は日常生活環境に組み込まれた「日常世界」。自らの限界に挑戦する自省行為は「スポーツ」となり、チームで科学的合理性を追求。「非日常環境世界」は今や、「宇宙空間とサイバー空間」へと飛翔！

拙著『登山の生態分類(学)』において、第1に「登山と山岳スポーツ」を区別し、第2に「登山を13種別」に分類した。その中で現代登山のおおむねは、次の群別に集約できる。

◎記録・記念登山 ◎健康登山 ◎観光・流行登山 ◎巡行登山

今や私に「大タテガビン南東壁」は登れない。ならば劣化した身体機能とともに、アルピニズムと人間総合力を知る老齢期なりの、「老いの登山」があるのではないか・・・！

真・善・美・そして自由を求める「情熱」があるかぎり・・・！

そんな心意気で、今も丹沢へ向かっている！！